

第2章 実測原図の分析

2.1 資料の状況

来歴 現在原図類は総合研究博物館の収蔵庫に、中性紙の封筒に入れられ厳重に保管されている。それ以前には中扉カラー写真のように背表紙に「モールス氏 大森介壙編 (図稿)」とある、25.8×21.5×6.5cmの厚紙製の「帙」に納められていた。学史に残る著名な遺跡でも実測図の下図まで揃って保管されている例は少ない。モースの遺品として大切に扱われてきたために保存状態は良く、『大森貝塚』掲載図が1点も欠けていないのは無論のこと再実測や未掲載の図まで残されている。

収められていたのは和紙に書かれた表題とモースの伝記作家 D.G. ウェイマンのメモ、モースによる図版ごとに分けたいわゆる「タトウ」と、そこにまとめられた実測原図の4種である。以下に述べるように、これらには時間差がある。『大森貝塚』以降に加えられたのは表題とウェイマンのメモである。タトウと原図は同時期であるが、原図のみ右上に径2.5cmの「東京帝国大学図書」の丸い刻印がある (Fig. 26)。

この帙に収められたモースの「図稿」は人類学教室図書室、生物学科図書室を経、2005年総合研究博物館に移管され、現在に至っている (諏訪元氏私信)。移管後、タトウで分けられた束ごとに封筒に入れられ、Morse 1 から Morse 19 の番号が振られている。Morse 1 は『大森貝塚』で使用されなかった原図、Morse 2 はウェイマンのメモ、Morse 3 から Morse 19 が『大森貝塚』掲載の図版 I から XVIII に対応している。2006年に、原図のデジタル画像化が720dpiの解像度で行われ (諏訪元氏私信)、その後筆者の調査に供されることとなった。

刻印については総合研究博物館人類先史部門の佐宗亜衣子氏に調査をしていただいた。氏によればこの印は「エンボス」と呼ばれ、「東京帝国大学」と改称した1897 (明治30)年以降から戦後の昭和35年頃まで、朱肉をつけたくない図書や資料に広く使われていたという。では4種の紙片がひとつの帙に納められたのはいつだろうか。

モースは1925 (大正14)年12月16日にセイラムで死去する。モースを慕う佐々木忠次郎は「大森貝塚碑」を建設するとともに、「モールス会 (MORSEANA)」を設立する。「Morseana 昭和十年秋創設 東京帝国大学理学動物学教室内モールス会 昭和十年秋或る晩、佐々木博士、宮嶋博士、谷津博士外五六名にて日本クラブにて晚餐を共にし結成の相談ありて出来たものである。本会は故モールス先生に関係ある図書公刊物写真書簡等を蒐集保存し、時に学会を開催或は他の学会に協賛し、図書其他を発刊、永く先生を記念するを目的とす」 (佐々木忠次郎博士伝記編纂会1940:p.203)とある。理学部最上階の小部屋のケースに収められていたというモールス会の資料には (ウェイマン1976下:p.245)、朱で「MORSEANA」という角印と整理番号が記されていた (田中2008)。しかし角印は原図にもその他の紙片にもない。モールス会はあくまで任意団体であろう。

貝塚出土品は『大森貝塚』作成時の1879 (明治12)年からモース考案の「列品室」、帰国後の翌年から「東京大学理学部博物場」と改称・開設された場所



Fig. 26 Mark of Imperial University
(Image processing of the original drawing)

に展示されていた（椎名 1988・諏訪他 2009・初鹿野 2017）。博物場は 1885（明治 18）年、理学部が元富士町へ移転するのに伴い閉鎖された。翌 1886（明治 19）年は工部大学校を統合して「帝国大学」と改称され、坪井正五郎が「東京人類学会」を創設している。その坪井は人類学を専攻し、1888 年にまずは理科大学動物学教室の助手に着任し、英国留学の後の 1892（明治 25）年に、「帝国大学理科大学人類学教室」初代教授に就任する。それに先立ち、1888（明治）年に本郷に坪井の研究室ができると、「博物場」の標本資料が坪井のもとに移管されたという（渡邊 1987：pp.331～332）。

坪井の下で学んだ鳥居龍蔵は回顧録『ある老学徒の手記』で、「今日考古学と人類学は別々になっているが、坪井博士逝去（大正二年）後までは、石器時代—原史時代までは、その遺跡遺物のごときは人類学が取り扱って」（鳥居 1953：p.3）いたから、博物場閉鎖後、人類学教室の「中央にガラス箱を置き、その中には大森貝塚（モース先生発掘品）、陸平貝塚（飯島・佐々木両先生発掘品）、その他の採集品が陳列されていた」（鳥居 1953：pp.26～27）と記している。原図もモースのタトウに分けられた状態で人類学教室に保存されていた可能性が高い。

1897（明治 30）年、「東京帝国大学」に改称、1913（大正 2）年には坪井がロシアで客死する。それから 10 年後の関東大震災で図書館は蔵書 70 万冊とともに灰燼に帰しただけでなく、「更に法文経三学部及生理学、医科学その他の教室備付の図書も同様な災禍を蒙った」（東京帝国大学 1930：p.7）のである。しかしこの中に理学部の名はない。この時原図が図書館及びその他の当該施設に収蔵されていたら、今日我々が眼にすることはできなかったかもしれない。

モース生誕 100 年にあたる 1938（昭和 13）年 6 月、教育博物館から改称した東京科学博物館において「日本の恩人モールス博士 Dr.Edward S.Morse を偲ぶ展覧会」が開催された。そこには「東大理学部人類学教室出品」として貝塚出土遺物とともに、「大森介墟古物編図版の原図 1 揃」・「貝塚発掘品写生図額 6 点」が含まれている。それに対して「東大、理学部モールス会出品」には文献と写真・書簡類があり、所蔵先が明確に分かれている（東京科学博物館 1928：pp.10～14）。「貝塚発掘品写生図額」というのは、平木が石版画に彩色したものではないか（平木 1936：p.72）。また、D. ウェイマンは 1939（昭和 14）年来日し、佐々木忠次郎によって建設された「大森貝墟碑」を訪れ（中西 2002, 田中 2008）、東京帝国大学教授で植物学の三宅驥一とともに写真に納まっている（Fig. 27）。この一連の旅程でウェイマンは人類学教室所蔵の原図を見てモース自筆と判断し、メモが帙と同梱されたのだろう。

資料の内訳 前述のように帙の中にはまず、薄手の和紙に書きなぐったような毛筆で「大森介墟編 原稿図」、右上に「人類学教室蔵」の朱印の押された表題がある。総合研究博物館ではデジタルデータ化の際にまずこの表題を 01-01 とし、最後の 19-10 のバイ貝まで、計 297 の番号を振っている。電子データでは前述中性紙の封筒の区分に対応するように、Morse 1 の封筒の表題を 01-01 とし、19-10 のバイ貝まで番号が振られている。本論で用いる原図の番号はこれに基づいてい



Fig. 27 D. Wayman when she came to Japan
(Nakanishi 2002)

る (Table 2)。並び順は基本的に『大森貝塚』の図版順に則している。一方 297 というのは図画や文字のある面の数で、紙数ではない。描画面が1枚の原図の表裏に渡るものが複数ある。さらにモース自筆の図版番号のついた、二つ折りでB 5判に近い大きさのいわゆる「タトウ」にも簡単なスケッチが残されている。帙に収納されていた実際の紙数は実測図 269 枚、表題 1 枚、タトウ 17 枚、ウェイマンの書面 1 枚の計 288 枚である。なお本稿では図各面について Fig.10 に示した正投影図第 3 角法の呼称に従い、土器であれば文様の施された主要な実測面を「正面」とし、その反対を「裏面」とする。以下「側面」・「底面」など、必要に応じて用いる。他の遺物もそれに準じている。

269 枚の遺物図の内訳は土器が 01 ~ 15 番台の 231 枚で、10 - 12 のみ裏面にもスケッチがあるから描画面は 232 面である。16 番台は土版類が 11 枚 11 面、17 番台は骨角器で 9 枚 9 面、18 番台が石器で同じく 9 枚 9 面の描画である。最後の 19 番台が軟体動物で、これのみモース自身が鉛筆の下描きの上にペンで直接墨入れしている。軟体動物は裏面にも描画したものが多く、9 枚 14 面となる。以上の結果、遺物は 269 枚 275 面に描かれている。なお描画が一枚の両面にわたる場合 a と b を付した。

原図 01 番台は表題と、描かれたものの結局『大森貝塚』には使用されなかった土器図である。同じような口縁部の突起のため、重複するものを除いたのだろう。次の 02 - 01 のウェイマンの書面を除いて、残る 03 番台から基本的に『大森貝塚』に掲載された遺物の順に原図が並ぶ。基本的にというのは使用されなかった土錘図 (16 - 12) が 1 点入っているからである。また二枚貝の図はいわゆる左殻が使われ、裏面に描かれた右殻の 19 - 02b・04b・05b・07b・08b は使用されていない。

03 番台以下の原図はモース自筆の図版番号などが書かれたタトウ 17 枚に分散されている。『大森貝塚』の図版第 1 版 (図版表題は「第一版」となっているが、以下表記を「版」に統一) から第 18 版に一致する。全 18 図版に対して 17 枚では一枚不足しているが、これは当初 44 点という多数の土器を PLATE XI として括っていた原図 13 番台が、おそらく石版に写す際に一図版に収まらず二分されたからである。13 - 02 ~ 29 まだが PLATE XI、30 ~ 45 ままで PLATE XII として、モースのペン字で原図に直接記入されている。『大森貝塚』の第 11 版と第 12 版である。

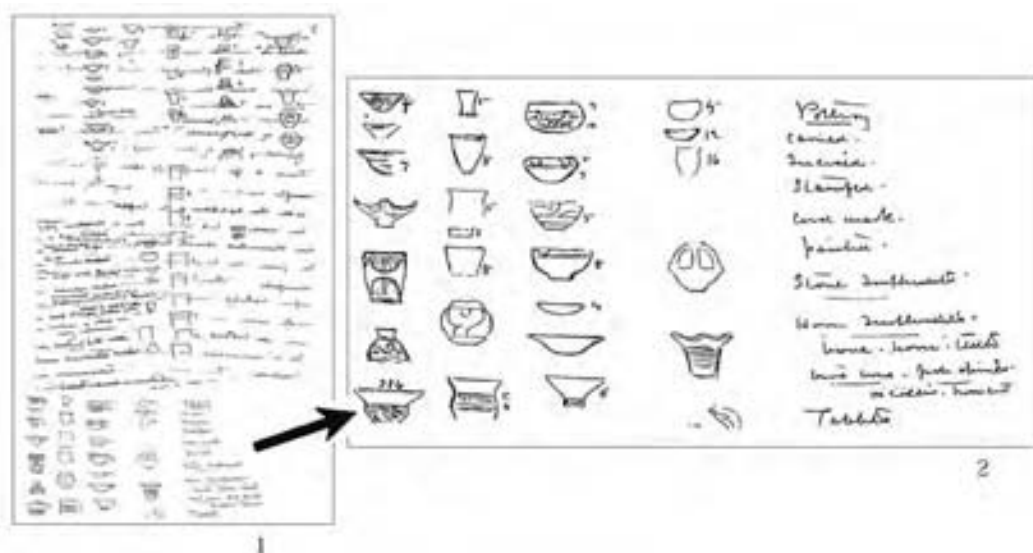


Fig. 28 Morse's notes on categories (Sahara 1988a)

ウェイマンのメモ 帙に納められていた作図に直接関係ない一枚が1939年8月10日付けの、モースの伝記執筆のために来日したウェイマンによるノートに走り書きしたものである(02-01)。ノートは22.4×12.0cmという非常に縦長の規格で、用紙の中央左寄りの位置に“NATIONAL EYE-EASE”と読めるメーカーの透かしが入っている。ウェイマンが持参した愛用のものなのだろう。その場の求めに応じたのだろう引きちぎった螺旋綴じのノートに、「鉛筆書きの図も、鉛筆で書いた説明も、またインクで書いた印刷工への指示も、エドワード=S=モールズ教授の自筆であることを確認します。おそらく1878-79年に東京で書いたものです。エドワード=S=モールズ伝記作家 ドロシイ=G=ウェイマン 1939年8月10日」(佐原1977: pp.32~33)と綴った、いわば鑑定書である。『大森貝塚』刊行からちょうど60年経ち、もはや原図を描いた木村静山の名は大学関係者にも伝わっていない。

モースの「タトウ」 モースは薄手の西洋紙をタトウにして、図版ごとに原図をまとめている。二つ折りの用紙は元に戻すと48.4×39.0cmになる。紙にはアメリカの製紙会社であろうか、“E Towwood Fine”、もしくは“A PIRIE & SONS 1872”という透かしが入っている。特に後者の年代から、この用紙がモースがアメリカより持参した可能性を示している。Morse 3、Morse 6、Morse 11とMorse 13の4枚タトウが“A PIRIE & SONS 1872”である。他の12枚に“E Towwood Fine”の透かしがあり、残り1枚(Morse 15)には透かしがないが同質紙である。これらの用紙は実測には用いられておらず、あくまで図版分類用に選択されている。二つに折って殆ど原図が納まる大きさである。

タトウに収まっていたのは『大森貝塚』に使われた03番代からの原図である。タトウのなかには鉛筆で“SHELL MOUNDS of OMORI NEAR TOKIO JAPAN.”(03-01)、“Shell mounds of Omori (near Tokio) Japan”(12-01)と表記を変えて表紙の体裁を示したものもある。また“Plate VI”とペン書きの08-01には、鉛筆で“PLATE VIII”と書かれたスケッチがある。10-01には赤鉛筆で“Anthropologica”とある。タトウの本来の目的は遺物の分類であるが、時に表裏にわたってモースの思考過程そのままに、ペン書きと鉛筆書きが交錯しながら興味深いスケッチが残されている。

佐原がピーボディ博物館で発見した重要なモース遺品の中に、貝塚出土土器の分類メモがある(佐原1988a: p.257)。分類案を略図とともに独特のくせ字で、自然科学者らしく定量的に記している。メモにもかかわらずここでもモースは、土器をま正面から描き出している。どれも原資料を同定できるほど特徴をよく捉えており、明らかに『大森貝塚』執筆用に作成したものである(Fig.28-1)。一時帰国中に検討するため持ち帰ったのだろう。この時点ですでにモースは出土土器の特徴と数量をきわめて具体的に把握している。当然静山へも明確な方針を示して実測すべき対象が選択され、作業も進んでいたことを裏付けている。

未知の先史遺物をどう分けどうまとめるか、モースは果敢に挑戦している。メモで検討した土器の特徴と数量をまとめたものがその下部にある。右上段に“Pottery”として、最下段の“Tablets”に至る項目が立てられている(2)。土器の他にも“Stone implements”・“Horn implements”といった名称が挙げられている。『大森貝塚』ではさらに“EARTHEN”・“STONE”・“HORN”という材質による組み合わせも試みている(Morse 1879: pp.6~7)。

メモ下部には土器について“carved”・“incised”・“stamped”・“cord mark”・“painted”と列挙され、この段階ではモースは施文の特徴に主眼を置いている。しかし最終的に『大森貝塚』では“Cooking vessels”・“Hand vessels”・“Vessels with constricted necks”・“Ornamental jars”の4種にまとめている(Morse 1879: p.6)。これは「鍋・シチュー鍋に対応する煮炊き土器」・「鉢や茶碗のような手にもつ土器」・「水入れにもちいた頸のすぼまった土器」・「装飾的な深鉢・鉢」と訳されている(モース

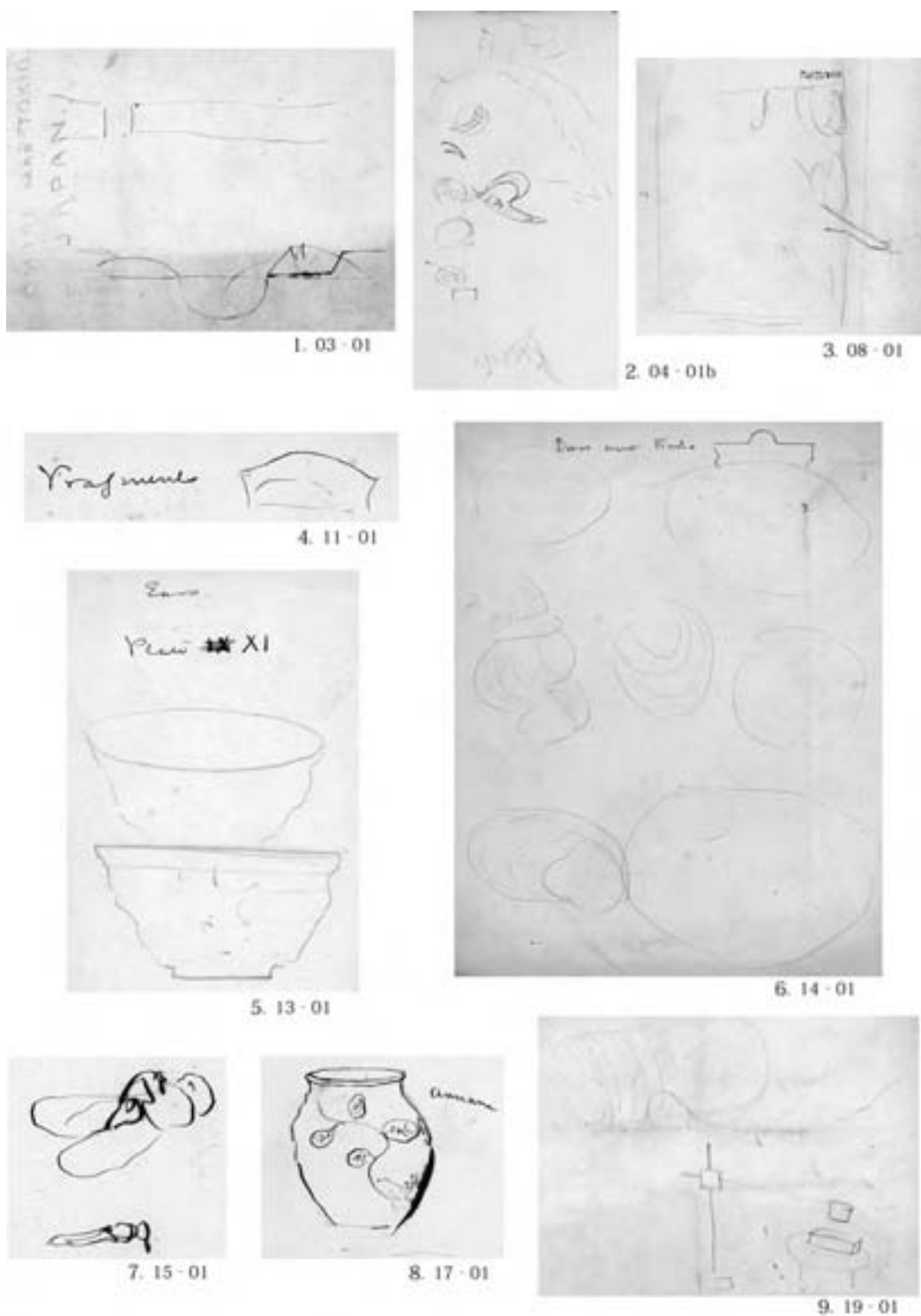


Fig. 29 Sketch on document file (part)

1983 : p.31)。器形から類推される機能・用途と装飾的要素とが交錯しているが、その途中経過を記しているのがこのタトウである。

17枚のタトウの内、土器は Morse3 (03 - 01) から Morse15 (15 - 01) までの13枚が該当する。ここには“Shallow pots round bottoms” (04 - 01a) や“Deep pots” (06 - 01・07 - 01) という器形による分類、さらに“Ornamental pots” (03 - 01) に対する“Flat vessels” (05 - 01) という装飾の度合い、さらに踏み込んで“Constricted necks and dry carving” (08 - 01) ・“Fragments of pottery finger squeezing borders” (09 - 01) ・“Fragments of pottery inside ornamentation and crenulated edge” (12 - 01) という装飾の特徴による分類が加わる。また口縁の突起を“Ears” (13 - 01) や“Knobs” (14 - 01) と表記し、これも区分している。

こうして図版ごとにまとめたものの03 - 01のように“PLATE IV”は“PLATE I”に変更されたり、図版番号のみで特徴の表記のないもの(10 - 01・15 - 01) や、逆に特徴のみで図版番号のないもの(11 - 01・12 - 01・14 - 01) もある。図版番号は最終的にペンで直接個々の原図に記入し、石版工へ指示した。

『大森貝塚』ではメモとタトウにあった“Implements” (17 - 01・18 - 01) を削除した材質のみの大区分となり、結局タトウの表題もすべて省略された。その原因が土器にあったことは想像に難くない。モースを悩ませたのはなんといっても多種多様な土器である。ダーウィニズムの信奉者である彼は出土した貝を現生種と比較したように、土器という人為物をなんとか進化論的に捉えようとしただろう。しかし縄文人の造形力は一筋縄ではいかない。分けてはみたものの各々次元の異なる項目の羅列に、自身も納得がいかなかったのではないか。多忙なモースに検討を重ねる余裕はなく、『大森貝塚』の記述は不本意ながら行き着いた結果だったと考える。

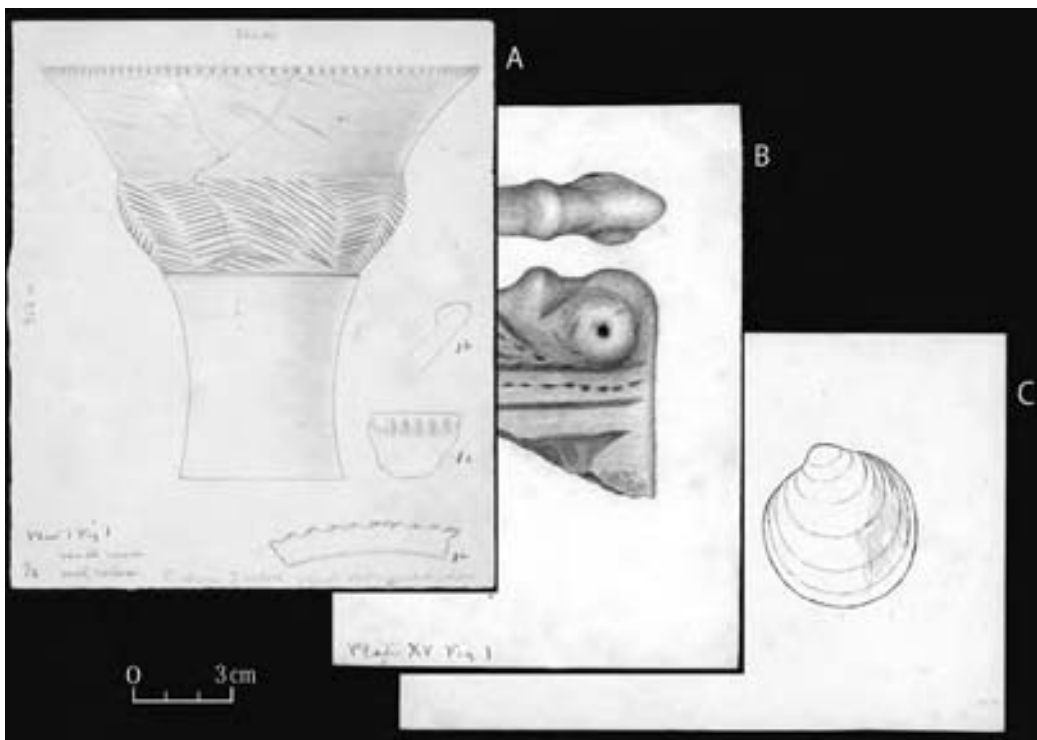


Fig. 30 Three types of paper

タトウのスケッチ 前述のようにタトウには本来の図版番号や表題の他に、ペンや鉛筆によるスケッチが残されているものが9枚ある (Fig. 29-1~9)。自身の備忘というよりも、傍らの人物に教示している観がある。

1はペン画で紙を横にして河川改修の仕組みを示したようであり、2・3には鉛筆で蝸牛と昆虫が描かれている。4~6には土器が描かれ、4と6は上部にペン描きされた表題と一致する。注目すべきは5で、ペン書きの図版番号と表題の下に、鉛筆で土器を真正面からと斜め上からの二通りの視点を示している。両者はまったく異なるのだと、傍らの静山に念を押したのだろうか。6の全面に薄く鉛筆で描かれたのは軟体動物のレイアウト案である。モースは軟体動物を図示する際の殻の左右にまで悩んでおり、当然それをひとつに収めた時のバランスも気になったのだろう。こうした感覚は図案家の経験による所が大きいのであろう。7・8はペン描きで、7は胸に両腕を置いた埋葬形態、8は植物の絵付けのある陶器らしき壺の横に、“owari”と読める地名のような表記がある。この頃蜷川式胤に師事して収集を始めた焼物の特徴を、自身の勉強のためにメモしたのであろう。9には鉛筆で、支柱に柄杓のような部品をつけた器具とコイルを巻いて注ぎ口をつけた微細図がある。動物学教室や江ノ島の臨海実験所で使用するものだろうか。どのスケッチも来日して間もないにもかかわらず、八面六臂の活躍を見せるモースの日々を物語っている。

2.2 実測用紙とモースのメモ

『大森貝塚』においてモースが最も主眼を置いたのは、「貝塚から出土した土器の様々な形態・装飾を余すことなく図示する」(モース 1983 : p.10) ことである。作業に不慣れな日本人を訓導し考古資料の実測図という珠玉の成果を得たことは、モースという類まれな個性なくては成し得なかったに違いない。一方明治政府は大学の開設にあたって海外から膨大な数の標本や器具を購入

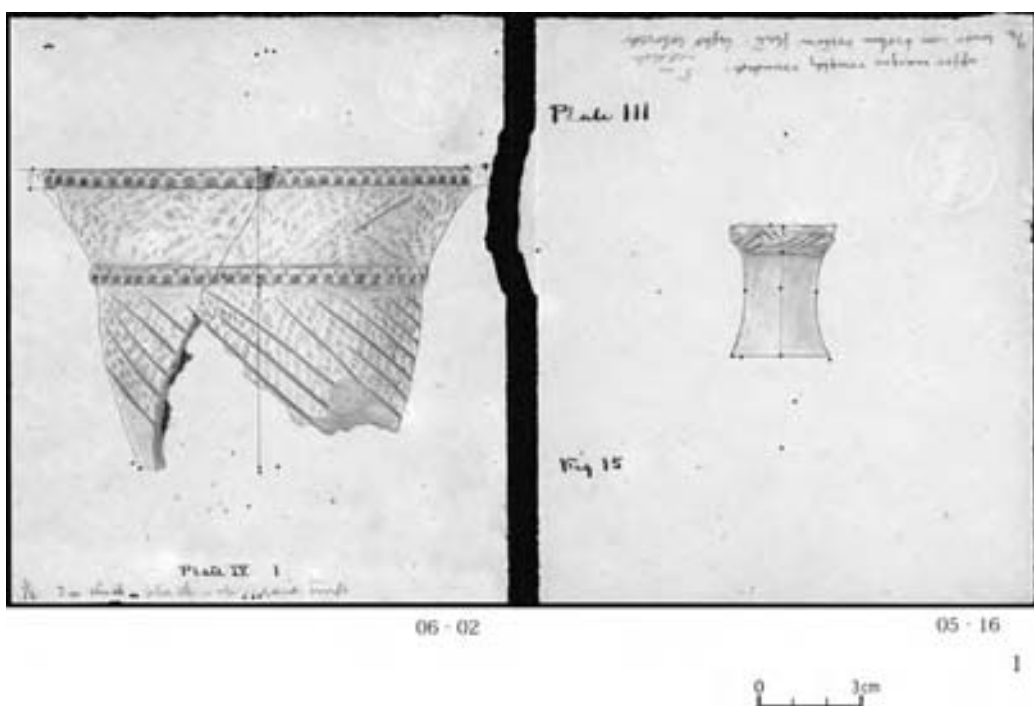


Fig. 31 Adhesion of paper